第43回

青森県少年の主張大会報告書

青い雲

主催：青少年育成青森県民会議　国立青少年教育振興機構

目　次

■ 第 43 回「青森県少年の主張大会」概要 …… P 2

■ 主催者挨拶 …… P 3

■ 来 賓 祝 辞 …… P 4

■ 発　　表 …… P 5～P12

■ 講　　評 …… P13

■ 第 43 回「青森県少年の主張大会」実施要綱 …… P14

■ 講　　演 …… P15～P16

■ 紹　　介

第 43 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2021 ～…… P17～P21

・内閣総理大臣賞受賞作品

・文部科学大臣賞受賞作品

・国立青少年教育振興機構理事長賞作品

・審査委員会委員長賞作品

第 43 回少年の主張全国大会開催要綱…… P22

第43回「青森県少年の主張大会」概要

■次　第

1　開　会

主催者挨拶	青少年育成青森県民会議会長	橋本　　都
来賓祝辞	弘前市長	櫻田　　宏

2　発　表

一隅を照らす	青森市立南中学校	３年	山谷　桜子
思いやる心	階上町立道仏中学校	２年	濱谷　歩香
僕たちの未来	階上町立道仏中学校	３年	林下　詩沓
みんなで変えようこの未来を	今別町立今別中学校	２年	横岡　茉子
ありのままの自分と向き合って	南部町立南部中学校	３年	釜渕　姫奈
あたりまえの事こそ	風間浦村立風間浦中学校	２年	亀谷　桜月
先人の知恵に学ぶ	青森市立荒川中学校	３年	伊藤　　優
嫌われるままでいいのか	弘前市立東中学校	３年	吹田　健太

3　講　演

「若者よ“ご縁”をつかめ！」

講師　フリーリポーター　　中島　美華　氏

4　表　彰

最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名

5　講　評

青少年育成青森県民会議　青少年専門指導員　坂本　　徹

6　閉　会

■審査員

青森県中学校長会	副会長	松山　正男
青森県ＰＴＡ連合会	副会長	村上　照幸
青森県青少年・男女共同参画課	課長	小坂　秀滋
青森県教育庁学校教育課	総括主幹	黒滝　和代
青少年育成青森県民会議	青少年専門指導員	坂本　　徹

主催者あいさつ

青少年育成青森県民会議
会長　　橋本　　都

皆さん、こんにちは。
第４３回青森県少年の主張大会に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

本来であれば、来賓の皆様をお招きし、盛大に大会を開催するところですが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、誠に残念ですが、今年度は、ビデオ審査方式で開催することといたしました。

このような状況にもかかわらず、開催に際し、弘前市の櫻田宏市長からは御祝辞を、また、講演予定のフリーリポーター中島美華さんからは「若者よ“ご縁”をつかめ！」と題したメッセージを頂戴いたしました。心からお礼申し上げます。

さて、この大会は、昭和54年の「国際児童年」を記念して始められました。未来を担う中学生の皆さんに、広い視野をもち、柔軟な発想や創造性に富み、物事を論理的に考え、自らの主張を正しく伝えることができる力をもってほしいと願い、実施してきました。

今年度は、原稿審査で選考された８人の中学生の皆さんが様々なテーマで主張発表を行ってくれました。審査員は、ビデオに映し出された８名の堂々とした姿に、次代を担うたくましさを感じ、主張の声からは、未来を拓く確かな創造力を感じたようでした。

大会を聴講する予定であった弘前市立東中学校の生徒の皆さんはじめ、県内全ての中学生の皆さんには、「自分ならどう考えるだろう」「自分ならどういう行動が取れるだろう」と自分自身に問いかけながら、報告書の発表を見てほしいと思います。

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、コロナ禍で先が見通しにくい中ですが、次代を担う皆さんには、多様な人々との関わり、つながりの中で自分を形づくり、心身ともに大きく成長する、人生の中でもかけがえのない中学という時期を通して、心身ともに健康で、他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していくなど、健やかに成長していってほしいと思っています。

この大会が、青森県の未来を担う皆さんの成長のきっかけになることを期待しています。

来賓祝辞

弘前市長　　櫻田　　宏

本日、第４３回「青森県少年の主張大会」が皆様方のご協力のもと盛大に開催されますことを、心からお喜び申し上げます。

また、長年にわたり本大会の開催にご尽力されている青少年育成青森県民会議の皆様に対し、深く敬意を表する次第であります。

本大会は、中学生の皆さんが、自らの夢や希望、これまでの社会との関わりの中で感じたことや思いを、自由に飾らない言葉で発表することにより、次の時代を担う青少年としての自覚や自主性を育てるとともに、同世代や青少年の健全育成に関わる私たち大人の、青少年に対する理解と関心を深めることを目的として開催されているものと伺っております。

近年の社会環境は、スマートフォンを始めとした情報通信機器の普及により、ＳＮＳなどが急速に発展し、文字によるコミュニケーションをとる機会が増えており、現在、中学生の皆さんが物心ついた時には、既にそれが当たり前の時代になっていたかと思います。

ＳＮＳ上での文字によるコミュニケーションは、世界中の多くの人と簡単につながることができ、様々な情報を瞬時に集めることができるという点で利便性が高いものでありますが、情報の送り手と受け手双方の感情が伝わりづらく、行き違いからトラブルに発展することも多くあります。

そういった中で、本大会での発表を通して、自分の考えや気持ちを、感情を込めて言葉で伝え、聴く側も発表者の表情や声の抑揚など、言葉でしか伝わらない微妙なニュアンスを感じとることで、お互いの価値観を尊重し、理解を深め合うことができるという、言葉で伝えることの大切さを改めて認識していただければと思います。

今回は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、ビデオ審査による開催となってしまいましたが、次の時代を担う中学生の皆さんがどういった考えを持ち、どういった主張をするのか非常に楽しみにしております。

皆さんは、これからの人生の中でたくさんの人との出会い、様々な経験をしていくことになります。それら一つ一つを大切に受け止め、時には友人と共有しながら、青森県の将来を担う若者として成長していってほしいと思います。

結びに、県内全ての青少年の明るい未来、そして、本大会の成功を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

【最優秀賞】

思いやる心

階上町立道仏中学校　２年　濱谷　歩香

「生きていて良かったと素直に思う。」

これは、競泳の池江璃花子選手が東京五輪に内定した瞬間に語った言葉です。池江選手が急性リンパ性白血病と診断されたのは二〇一九年二月。辛い抗がん剤治療、骨髄移植を受け、驚異的な回復により、間に合わないと言われた「東京の切符」を手にしました。涙を浮かべている池江選手の姿を見て、「努力が報われて良かった。」と、私は涙が止まりませんでした。

感動の会見からほどなく、ありえない事態は起こりました。池江選手に向けられたツイート。それは、ナイフのような残酷な言葉でした。「アスリート失格」「辞退しなかったら罪は重い」「利己的」「バカ」「自分のことしか考えていない」……。大病を克服し、やっとつかんだオリンピック。辞退や反対の表明を迫る意味が全く分かりませんでした。頑張ったことの全否定です。彼女はツイッターで苦しい胸の内を明かしました。

「私に反対の声を求めても、私は何も変えることはできません。この暗い世の中をいちはやく変えたい、そんな気持ちはみなさんと同じようにもっています。ですが、それを選手個人にあてるのはとても苦しいです。」

言葉を選んでいましたが、その悔しさはどれほどだったでしょう。

病気になる前の池江選手は、誰よりも練習し、誰もが認めるトップアスリートでした。白血病を患った時のショックは計り知れません。しかし、奇跡の早さで病を乗り越えられたのは、本人のたゆまぬ努力と、それを支えた家族や医療関係者のサポートがあったからです。池江さんの姿は、そのまま、これから治療を受ける人、今治療を頑張っている人の励みとなっているのです。「どうして温かく見守ってあげられないんだろう。」心ないツイートに彼女が苦しんでいると思うといたたまれない気持ちになりました。

コロナ禍では、同じような理不尽が執拗に繰り返されています。例えば、命がけで働いている医療従事者の方々への誹謗中傷です。目に見えないウイルスの脅威は、身体だけでなく、心もむしばんでしまっているかのようです。「その差別は、いかなる理由を並べようとも、絶対に間違っている。」こぶしを握りしめた時、看護師をしている母のことを考えました。

幼い頃は、緊急患者の処置や検査で病院から連絡が入ると、母はすぐに病院に駆けつけなければならず、私は寂しい思いをしていました。でも現在は親子の会話が増えたこともあり、家族の一員として母を支えたいと思っています。母の頑張りを素直に受け止められるようになったどころか、将来看護師になりたいという夢をもつようになりました。

社会のエッセンシャルワーカーとして、看護師は過酷で重大な業務を担っています。それを経験し、理解している母は、私が同じような道に進むことは賛成していません。それでも私は、人の役に立ち、一人でも多くの命を救う手伝いがしたいと思っています。

コロナは人間から多くのものを奪いました。その一つが人を思いやる心です。人が人の痛みを想像できない。これまでの常識が通用しない。そんな今だからこそ、「他人を思いやる」という、人間にしかできない心を、一人一人、取り出すことが必要なのだと私は思います。

世界を見渡すと「コロナ禍で頑張る全ての人へありがとう」の輪が広がっています。私は地球家族の一人として、その輪の中で懸命に生きていきたいです。

【優秀賞】

嫌われるままでいいのか

弘前市立東中学校　３年　吹田　健太

「こっち来んな。チームの恥。」

この言葉は、今年三月の全国大会前日の練習中に、部員にかけられた一言です。皆さんは仲間に嫌われたことがありますか。よかれと思って他の人のために行動したのに、それが空回りして嫌われてしまう……。そんな時、僕はいつも悲しく虚しい、やるせない気持ちで胸がいっぱいになりました。そして時が経つにつれて、何も解決していないのに、僕のその様々な感情は、心の中で消化されないまま消えていきました。僕はこれが嫌いでした。

卓球部の部長として、団体戦を勝ち抜くためには、このチームワークの不和を改善するための対策が必要だと考えました。そう考えてはみたものの、何をどうすればいいのかわからぬまま、全国大会は終わり、そして何も変わらない状況で新入部員を迎えての部活動が始まりました。部長として、信頼を得られるどころか、ボールをぶつけられるときもありました。

そんなある日、僕は一冊の本に巡り会いました。その本のタイトルは「リーダーの禅語」。この本を読んで、部長である僕には、「風格」「育成力」「平常心」「行動力」「信頼力」、この五つが足りず、今身につけるべき大事な五つだということが分かりました。「行解相応」という禅語は「信頼力」の一つであり、また、今でも自らを律するときに、脳裏によぎる大事な禅語です。この語は、簡単に言うと、子どもが親の背中を見て育つようなものです。部活で言うなら、部員が部長の背中を見て成長するということでしょう。部長が率先垂範して汗をかき、必死になって練習すれば、部員が部長の背中を見て自然と「自分たちも頑張らなくては」という気持ちになり、お互い切磋琢磨し合えるのではないかと考えました。

このことから、僕はまず自分から休憩中にサーブをしたり、練習にいつもよりフットワークの練習を多くしたりして、今まで以上に頑張って練習しました。そうした中行われた春季大会では、好成績を収めることができ、皆の僕を見る目も変わったような気がしました。さらに、部員も積極的に練習するようになり、だんだん部活動にも活気が溢れてきました。練習量に比例して、自分の技術が上がったと体全身で感じることもできました。反面、同じようなパフォーマンスを大会で発揮できるのかという不安に襲われたり、チームメイトは自分を信頼してくれるのかと、ひどく落ちつかない気分になったりしました。皆に嫌われないように遠慮している自分もどこかにありました。

ある日、テレビのニュースで野村克也さんの名言が取り上げられているのを目にしました。それは、「好かれなくても良いから、信頼はされなければならない。嫌われることを恐れている人に、真のリーダーシップはとれない。」という言葉です。この言葉を聞いたとき、僕の心にくっきりと明るい光が差し込みました。今まで僕は嫌われることを恐れて、一人で考え込み悩んでいました。しかし、部長として、嫌われてもやはり言うべきことはしっかり言うのが正しいのだと確信がもてました。後輩は練習にさそいにきたり、アドバイスを貰いに来たりなど、一人で解決できないときは僕に手助けを求めてきました。

そして迎えた中体連の試合当日、野村さんの言葉を胸にチームの皆を精一杯応援し、自分の番ではチームの士気を上げるために今まで以上のパフォーマンスをしました。試合の合間にお互いにアドバイスしあったり、涼しくなるように、うちわであおいであげたりしました。結果団体戦では、決勝トーナメントをストレート勝ちで優勝を収めることができました。試合で勝った時は今までの努力が認められたような気がして、うれしさや喜びがこみあげてきました。これは部員全員が好き嫌いなくお互いに信じ合い、また、教え合い高め合えたからだと僕は思います。そして今。東北大会、全国大会を目指し、効率的に、より実践的に先生方からもたくさんアドバイスをいただき、練習をしています。

部長としていかに練習したら上達するのかと、来る日も来る日も深く自分に問いかけた一年間でした。今では、悩んでいたことが嘘だったかのようにチームメイトと練習しています。「出会おう　新しい自分」。これは、東中学校の教育目標です。様々な人やこととの関わりを通して新しい自分に出会おうという意味です。僕は卓球部の仲間との関わりから、「新しい自分」に出会えたと思っています。チームの和をさらに強固なものにするために嫌われることを恐れず、真のリーダーとなれるように、これからも頑張っていきたいと思います。

【優良賞】

一隅を照らす

青森市立南中学校　３年　山谷　桜子

「それでは、点火してください。」

私が火をつけ、トーチキス。その瞬間、彼は「うおー」と叫びました。

六月十日、私は「東京オリンピック聖火リレー点火セレモニー」に青森市代表ランナーとして参加しました。きっかけは、六年生の頃の担任の先生が推薦してくださったこと。二年以上前から準備が着々と進められていたのですが、新型コロナウイルス感染拡大を受け、オリンピック・パラリンピックは延期。青森県においても、公道でのリレーは中止となりました。代わりに、青い森公園を舞台に、点火セレモニーが実施されたのです。

待ちに待ったセレモニー当日。会場には、私も含め、十三人のランナーが集いました。一人三十メートル程走って、聖火を「トーチキス」でつなぎ聖火皿まで届けます。年齢、職業、住んでいる地域も違う人たちの中で、私は、戸惑っていました。知り合いがいなかったこと、最終ランナーである小坂大魔王さんに聖火をつなぐ大役を与えられたことで、緊張していたのだと振り返ります。少し離れたところに同じ世代の女の子がいましたが、話しかけることはできませんでした。自分はなんて社交的ではないのだろう、とモヤモヤが止まりません。緊張のうちに、セレモニーはあっという間に終わってしまいました。

後に、広報誌や報道を通して、セレモニーの成功のために、驚くほど多くの人たちが裏で動いていたことに気づきました。点火の瞬間叫んだのは、小坂大魔王さん。彼はセレモニーを何とか盛り上げたいという気持ちを語っていました。他にも、誘導してくださったスタッフの方。説明役の方。司会の方。消毒を促す方などなど！私もそのチームの一員だったのだと思うと、なんだか不思議な気持ちになりました。良い悪いという評価を超えて、目には見えない、けれども社会の中の「つながり」を実感できたスペシャルな体験でした。

「つながり」といえば、私にとって大切な場所があります。それは、部活動です。私は陸上競技部に所属し、四×一〇〇メートルリレーの第一走を務めていました。リレーは、陸上の中のチームプレー。コンマゼロ一秒を争う過酷な競技です。四人でバトンをゴールにつなぎます。速い人が走るから勝てるわけではありません。個の速さはもちろん大切。でも、それ以上に、バトンをつなぐチームワークが欠かせません。私はリレーメンバーの中で、足が速い方ではないことを大変気にしていました。つらくて、苦しくて、何度もあきらめたくなりました。それでも、最後までやり遂げることができたのは、仲間がいてくれたから。私のチームは、みんな明るくて、個性的で、いつも私を励ましてくれました。だからこそ、私ができることを最大限やって速くなり、皆の役に立ちたいと思って走りました。共にやってこられたことを誇りに思います。

先日、最後の県大会に参加しましたが、点火セレモニーの場にいた同年代のあの女の子も、同じ会場にいました。違う種目で、やっぱり話をすることはなかったけれど、何だか不思議な縁でつながっているなと思いました。

私は今まで、自分はあれもできない、これもできないと、自分のできないことにばかり目を向けてきました。でも、こんな自分だからこそできることもあると学びました。

今、皆、何かしらを我慢して暮らしています。自由に往来することすらままならず、「つながり」が見えにくいと思います。どうしたって、マイナス面に目が向いてしまう……。でも、ちゃんと私たちは「つながりの中で生きています。」私には私の、あなたにはあなたのつながりの中で。

こんな時だからこそ、「つながり」を信じて、自分ができることをやり抜こうと思います。人とかかわること。それが生きていく中で最も大切なことだと、思うからです。

【優良賞】

僕たちの未来

階上町立道仏中学校　３年　林下　詩沓

皆さんは神様が存在すると思いますか。僕は存在するとは思いません。もちろん、語り継がれてきた物語に存在したという意見もあります。しかし、もし神様がいるのなら、こんな世界を創りますか。人種差別で命が奪われたり、紛争で幼い子供が危険にさらされたりする、そんな運命を背負わせますか。もし神様がいるのなら、そんな神様は嫌です。

国語の授業で、ＳＤＧｓについて調べていたときのことです。ある言葉に衝撃を受けました。

「紛争と被害によって奪われる子どもたちの未来。命を落とさずに生きることができても、子どもたちが奪われているものがある。それは教育」

僕はさっそく、ＳＤＧｓの十六番目、「平和で公正な社会」について調べてみました。すると、世界で五分に一人、暴力・虐待・紛争によって子どもが亡くなっていることや、出生登録がないため学校に通うことができないことなど、多くの問題が書かれてありました。肌の色や目の大きさなどの身体的違いや人種の違い、宗教的違いなど、無意識な「差別」も暴力や紛争につながっていくのだそうです。なぜこのような問題が起こってしまうのか、なぜ差別しなければいけないのか、到底理解できません。

僕は小学生のとき、同学年七人で生活してきました。幼い頃から知っているので全員が仲良く、常に助け合える反面、行事の準備で一人が欠けるとますます仕事が増えて大変です。しかし、休んだ人を責めることはしません。お互いさまだからこそ、声をかけたり相手を気遣ったりすることが日常茶飯事でした。

中学校では人数が少し増えて、十四人になりました。学年が上がるごとに、一人一人がリーダーとしての責任を果たさなければいけませんがそれぞれが抱える悩みや思いを本音で話せる関係です。教室には明るい笑い声と笑顔があふれています。僕にとっては家族のような、とても安心できる居場所です。

それが当たり前ではない世界が存在することをさらに実感したのは、ノーベル平和賞を十代最年少で受賞したマララ・ユスフザイさんのスピーチです。十五歳の少女が通学途中に銃撃にあい、奇跡的に生き抜くことができました。恐怖に怯えて生活し、危険な状態にあっても前を向き続ける姿、自分を撃ったタリバン兵を憎まず、非暴力を訴える強さ。生き残った彼女が世界中に訴えたことは、「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペンが世界を変えられる。教育こそ最優先」という内容でした。

僕は愕然としました。そして、教育の力が一番脅威であることを知りました。僕は今回、ＳＤＧｓを調べたことで、新しい価値をもつことができたような気がします。日々の勉強も環境に恵まれているから充実して取り組むことができます。仲間と笑い合えるのも安心安全に過ごすことができるからです。世界中で起きている事実や様々な文化、その人が生きている背景を知ることが、互いに分かち合い認め合うことにつながっていくはずだと信じています。

ＳＤＧｓをきっかけにここまで学べたことも、自分自身にとっては貴重な経験です。僕はこれから、高校、大学、社会という未知なる世界へと歩んでいきます。不安なこともありますが、仲間と助け合い協力すること、自分の考えだけで判断せず、相手の立場に立って行動することを大切にしていきたいです。そして、未来の子どもたちが神様は良い人だと思えるようにこれからの生き方を考え、よりよい未来を創っていきます。

【優秀賞】

みんなで変えよう　この未来を

今別町立今別中学校　２年　横岡　茉子

おねがい　ゆるしてください。
本当に同じ事はしません。
できなかったことを直す。
あそぶってあほみたいだからやめる。
言われなくても自分でできるようにする。

私は、この言葉を読んだとき、泣きそうになりました。これは、五歳の女の子が親に書いた手紙です。五歳といえば、いろいろなことに興味をもってたくさんの経験をし、間違ったり失敗したりしながら成長していく時期なのに。この手紙を書いた結愛ちゃんには、そんなことも許されないのかと悲しみで胸がいっぱいになりました。

私が虐待について興味を持ったきっかけは、国語の授業です。新聞の投書を書く、という授業で、社会問題について調べました。そして、自分が思っている以上に虐待が多いということ、そして先程の手紙を知ったのです。

私は今、十四歳です。私の母は、手伝いはさせるけれど、遊ぶことは子供の仕事の一つと言ってくれます。それなのに、五歳の結愛ちゃんが「あそぶってあほみたいだからやめる」と手紙に書くなんて。

でも、つらいのは虐待された子供だけなのだろうか……。新聞の投書の記事を書こうとして、私の心の中に浮かんだのは、こんな疑問でした。そこで、私は更に調べてみました。

虐待には四種類あるそうです。なぐる、ける、たたくなどの「身体的虐待」、言葉でおどす、存在を無視するなど、精神的苦痛を与える「心理的虐待」、食事を与えない、ひどく不潔なままにするなどの「ネグレクト」、性関係の強要などの「性的虐待」の四種類です。児童相談所によると、どの虐待にも、親の孤独な心が原因としてあり、それが「虐待」という行動に出ているそうです。

虐待に興味をもってニュースを見てみるとよく「あの親は……」という愚痴を聞きます。私は、その言葉が、虐待をする親を今の姿にしてしまったのではないかと感じました。

悪口を言うことは、人によってはストレスをなくすための方法なのかも知れません。しかし、その悪口は、周りにどのような影響を与えるのでしょうか。誰かが悪口を言うと、それを聞いた人は、「こんなに悪く言われる人なら、一緒にいない方がいいのではないか」と感じるのかもしれません。相手のことをよく知らなくても、その人に近づかないようにしたり、関わりを避けたりするかもしれません。そうして、誰かの悪口が誰かを孤独にし、孤独が虐待につながっている、ということは考えられないでしょうか。

人を傷付けて嬉しい人なんていません。きっと、虐待をしていた親だって、つらかったはずです。私だったら、自分の思っていない方向に事が進んでしまったとき、支えてくれる人、助けてくれる人が必要です。今の私にとって、一番の支えは親です。しかし、私たちを支えてくれる親にだって支えが必要なはずです。なぜなら、同じ人間だからです。

こう考えると、虐待も、私たちの身近な問題であるいじめも、背景にあるのは同じことなのではないでしょうか。

虐待に限らず、人と人とが関わることで問題は生まれるし、逆に、人と人が関わることで問題を解決することだってできます。だからこそ、自分の行動で未来は変わるかもしれません。人を悪く言うのではなく、理解し、支え、味方になってあげようとして人と接することが大切なのではないでしょうか。

私は、虐待について調べ、考えるうちに、まずは自分の身の回りのことを振り返ってみることが大切だと気付きました。私自身の力はほんの小さな力でしかないけれど、小さな力が集まることで世の中は変わるのではないかと、今私は思っています。

【優良賞】

ありのままの自分と向き合って

南部町立南部中学校　３年　釜渕　姫奈

突然ですがみなさん、コンプレックスはありますか。誰にでも一つはコンプレックスがあると思います。私の一番のコンプレックスは、この、顔の赤いあざです。しかし、今はこれを一つの個性だと思っています。

このあざは、私が生まれたときからあります。生まれた直後は、絵の具を塗ったように真っ赤で、助産師さんが驚いていたようです。このあざは「単純性血管腫」という、生まれつきの毛細血管の異常です。毛細血管が異常に増えて集まっているので、皮膚が透けて赤く見えています。人によって色や形、出る場所や症状はそれぞれです。

私は、いつも新しい環境や、知らない人が多い場所に行くとき、このあざを周りの人にどう思われるのか、心配でした。小学校低学年のころ、上級生にあざのことをからかわれたり、インターネットで、同じ病気の人がいじめに遭っているのを知ったりしたからです。

特に、中学校に入学するとき、新しいクラスメイトに、何かひどいことを言われないか、あざのことを理解してもらえるか、とても不安でした。そこで、先生に許可をもらい、三ヶ月くらい、ファンデーションなどを塗ったり、マスクをしたりして、あざを隠していました。今は、クラスメイトがみんな優しい人だとわかったし、私のあざのことも理解してくれているので、隠さずに堂々としていられます。

私は去年、このあざが一生治らないことを知りました。治らないどころか、大人になるにつれてあざの面積が大きくなったり、色が濃くなって、あざの部分が盛り上がったりすることもあるそうです。最初にこのことを知ったとき、悲しくて、目の前が真っ暗になるような感じがしました。しかし、数ヶ月たったある日、鏡を見たとき、こう思いました。「一生治らないなら、このあざを個性として生かしていこう」と。私はこの日、自分のコンプレックスを前向きに捉え、向き合っていこうと決意したのです。

はじめにも話しましたが、コンプレックスは誰にでもあると思います。まぶたが一重であるとか、運動が苦手だとか、身長が低いだとか、悩みは私のあざのように人それぞれで、つらさも人それぞれだと思います。整形や手術で治せるものもあれば、どんなに努力しても、どんなにつらくても治せないものもあります。

私はコンプレックスをなくすために整形をしたり、手術をすることは悪いことではないと思います。しかし、それによって形を変えられてしまった自分を、心から愛することはできないのではないかと思っています。また、自分のコンプレックスを受け入れられないと、ずっとそれを気にして、前向きに生きていくことができないのではないでしょうか。だから、せっかくなら、自分のコンプレックスと楽しく向き合ってみませんか。私は、このあざと生きていこうと決めた日から、考え方が変わり、ポジティブになりました。「これが自分だ」と堂々と胸を張って生きることができれば、人生が明るいものになると思います。

あなたは今、自分が嫌いかもしれません。コンプレックスが嫌で、苦しくて仕方ないかもしれません。しかし、そのコンプレックスは、いつか個性になります。いつか、自分だけの武器になります。ありのままの自分を愛することはとても難しいかもしれません。私は十四年かかりました。私は今、とても幸せです。つらいことがあっても、この顔で、あざがあってよかったと思っています。だから、いつかあなたも自分を愛せるようになるまで一緒に歩いていきませんか。

【優良賞】

あたりまえの事こそ

風間浦村立風間浦中学校　２年　亀谷　桜月

「おはようございます」。朝、人と会ったらあいさつをする。これは当たり前のことである。みなさんは日々の生活の中で、当たり前のことが本当にできているという自信はありますか。

五月中旬、体育祭練習中の出来事で、今でも忘れられないことがある。その日は体育館も、外も、どこにいても暑かった。燃え上がるような暑さに見舞われて体調を崩した人もいた。周りの人は皆、ハーフパンツや半袖になっている。そんな中、一人だけ長袖長ズボンの人が「暑い」と何度も口にしていた。私はハーフパンツや半袖になれば良いのに。そう思った。きっとその場にいた半数以上の人が同じ考えだっただろう。私は、その生徒に言った。「そんなに暑いなら半袖とかハーフパンツになったら良いじゃないか。」そのときは適切な意見だと思った。言うべきことだと。私は正しい。そう考えていた私だったが、そんな考えは徐々に変わってしまった。相手が少し悲しんでいたからだ。言い過ぎたか。もう少し優しく声をかけたほうが良かったか。そんな考えが頭の中を駆け巡った。もっと言い方もあっただろうし、言うタイミングもあったかもしれない。その後、何か声をかければ良かった。いろいろ考えると今でも当時のことに責任を感じている。言葉の重さを感じた。言う内容だけでなく、タイミングや言い方も考えて発言するべきだと感じた。

また、こんなことがあった。ある日、３、４人の生徒がその場にいない人の話で盛り上がっていた。話の内容は、読み間違い、言い間違いのことを笑っていて、私はあまり盛り上がることのない話題だと思った。しかし、その生徒たちは何度も何度も繰り返していて、何も言えなかった。これを本人が聞いたらどうなるのだろうか。それから数日後。話題に取り上げられていた人がその話を聞いてしまった。そして、悲しんでいた。私はその人に声をかけた。すると、悲しそうに、「たった一言の言い間違いなのに。」と言っていた。確かにたった一言。私はとても悲しくなると同時に後悔した。あの時、私が一言いっておけば良かった。話題にしていた人たちはきっと、「少しいじっただけだから。」こう言う。しかし、人の失敗をばかにしたように、笑って悲しい思いをさせてはいけない。友達同士だから。昔から一緒にいるから。どんな理由があっても「相手が嫌だ」と思ったその行為はいじめになる。私にはそんな思いをさせないことができた。「そんな話で盛り上がっていたら、嫌な思いをする人がいるよ。」そんな一言が言えたら良かったと後悔した。

私たちは日々の生活の中で大事なことがたくさんある。その多くは誰もが知っている。当たり前のことである。言葉は人を勇気づけることも、傷つけることもできる。言葉にそんな力があることはみんながわかっていることだと思う。だからこそ、自分の言葉には責任をもち、話したい。そして、自分の言葉で人を勇気づけたり、助けたりできるようにしたい。「当たり前のことこそ大切に」という言葉がある。自分自身の将来のために。そして、周りの人と良い人間関係を築いていくために、当たり前の事を大切にしていきたい。

【優良賞】

先人の知恵に学ぶ

青森市立荒川中学校　３年　伊藤　　優

私は、今年の修学旅行で、岩手県宮古市田老地区を訪れ、防災について学習する機会がありました。ここは、今から十年前の二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災の津波によって、大きな被害に遭ったところです。当時の津波の高さは、十七ｍにも達し、死者・行方不明者一八一名という多くの尊い人命が失われました。

それまでの田老地区では、万里の長城の異名を持つ高さ十ｍ、総延長二.四ｋｍの防潮堤が整備されていて、地元住民の方々は大きな信頼を置いてきました。しかし、大震災後の津波は、それを粉々に破壊してしまったのです。住民は口をそろえて「防潮堤があるから大丈夫」、「まさか津波が防潮堤を乗り越えるなんて思いもしなかった。まして防潮堤が壊れるなんて」と話していたそうです。実際には多くの犠牲者が出てしまいました。私は、絶対大丈夫なんてことはないのだと考えさせられました。

その一方で、防潮堤に頼らず、防災意識を高めて人的被害を最小限に食い止めたのが、宮古市の角力浜町内会でした。ここでは、地区内の高台に避難誘導路を整備し、それを使った避難訓練を行っていました。さらに緊急避難場所を盛り込んだ津波避難マップを作成して、町内全てに配布するなど、日頃から災害に備えていました。町会長さんは、

「個々で逃げる意識を持つことが人的被害を最小限に抑えることにつながる。」

と話していました。

また、明治や昭和に起きた三陸大津波によって、集落が二度も壊滅的な被害を受けた宮古市姉吉地区には、「此処より下に家を建てるな」という教訓を伝える石碑が建てられています。石碑に残すことで、命を守る教訓を後世に伝えているのです。

私は今回の見学で、現地に行かなければ分からなかったことを学ぶことができました。それは、過去の大地震や津波を経験した人々の声や知恵に耳を傾けることの大切さです。防災対策について成功している地域は、そこに住んでいる人々が責任を持ち、自分たちで解決しようとする高い危機意識を持っていました。私が訪れた田老地区には、「つなみてんでんこ」という言葉がありました。これは、てんでん、ばらばらに逃げなさいという意味だけではなく、それぞれが自分の命は自分で守るという地区独自の防災教育の言葉でした。それは二度と同じ悲しみや過ちを繰り返さないための、そこに暮らす人々の知恵と愛情を示す言葉なのだと、私は実感できました。

災害はいつまた起こるのか分かりません。だからこそ、私たち若い世代が防災に対して関心を持ち続け、しっかりと学ぶことが大切だと思うのです。そして、悲惨な経験から得た知恵と工夫を引き継ぎ、後世に伝える努力をしなければならないのではないでしょうか。

私たちの荒川中学校では、小中連携事業として、学区の小学生や地域の方々と一緒に、防災訓練を行っています。昨年は、起震車を使って地震体験をしたり、避難所で使うスリッパを新聞紙で作ったりしました。そこで防災に対する意識をしっかり持って行動することが大切だと実感しました。

今年も日本各地で、多くの命を奪う災害が起きています。私は、災害が起きたときに、自分は何ができるのか、何をしなければならないのかを意識しながら、地域の一員としての自覚を持って、今年の防災訓練に臨みたいと思います。

【講　評】

青少年育成青森県民会議
青少年専門指導員　　坂本　　徹

コロナ過のため、発表を直接聞くことができなかったのは残念でしたが、動画からでも皆さんの熱い思いが十分に伝わって来ました。

山谷桜子さんは、オリンピック聖火のトートキスという貴重な体験と陸上競技大会での出来事から、「つながり」を感じ取っていました。リレー競技においても「つながり」は大切だったのですね。仲間と共に前向きに生ようとする姿が素敵でした。

濱谷歩香さん。誹謗中傷に負けない池江璃花子選手と、コロナ過で奮闘する看護師の母の姿から、「思いやり心」の大切さを話してくれました。更には、色々と考える中から、自らが将来進むべき道を見出しましたね。力強さを感じます。

林下詩沓さんは、SDGs について調べたことで様々な問題点に気付くことができました。特に「教育の力」については大きな発見だったのではないかと思います。未来の子供たちが「神様は良い人」と思える社会を作って欲しいです。

横岡茉子さんは、子供の虐待という重大なテーマに正面から向き合った姿勢が印象的でした。しかも、虐待する親を短絡的に非難するだけではなく、社会構造にまで踏み込んだところは秀逸だと思います。

釜渕姫奈さんは、コンプレックスという誰にもあるような身近なテーマを取り上げたことで、多くの共感を得られたと思います。自らの心境の変化を赤裸々に語ってくれました。そのことが人々に大きな勇気を与えてくれたと思います。

亀谷桜月さん。何気ない会話の中の何気ない言葉が引き起こす誤解やすれ違い。けれどそれは、配慮という「当たり前の事」で防ぐことができる。日常生活でつい忘れがちなことを気づかせてくれました。

伊藤優さん。修学旅行で訪れた震災の被災地での体験から、先人の知恵に学ぶことの大切さに気づきましたね。そのことを、実際の防災訓練に活かそうという姿勢が立派だと思います。周りにも広げて欲しいです。

吹田健太さん。１冊の本との出会いによって迷いを断ち切り、野村克也氏の言葉から具体的な行動に繋がりました。辛かったことも糧として、真のリーダーとは何かを掴みとりましたね。今後の活躍が楽しみです。

８人それぞれに取り上げた話題は異なりますが、共通していたのは皆とても真摯に向き合っていたことでした。また、現時点での答を自分なりに考え、それをエネルギーとして前に進もうとする強い意志を感じます。この大会でいただいた感動を忘れず、皆さんの歩む姿をずっと見守っていきたいと思います。

第43回「青森県少年の主張大会」実施概要

1　趣　　旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められている。そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切である。

未来に向けての夢や希望、社会との関わりで感じていること、心に響いた出来事から生じた思いなどを中学生が発表することにより、自分の生き方や社会との関係を考えるとともに、同世代や大人の、青少年に対する理解と関心を深めることを願い実施する。

2　審 査 日

令和３年９月14日（火）　13：30 ～ 15：00

3　主　　催

青少年育成青森県民会議、独立行政法人国立青少年教育振興機構

4　後　　援

青森県、青森県教育委員会、青森県中学校長会、青森県私立中学高等学校長協会、青森県ＰＴＡ連合会、弘前市教育委員会

5　審査会場

青森県庁議会棟６階　第１委員会室
（青森市長島１丁目１－１）

6　実施方法

所定の内容での少年の主張を県内中学生から募集し、原稿審査で選考された８名によるビデオ審査を行う。

7　次　　第

（１）開会
（２）主張発表
（３）審査
（４）結果発表
（５）閉会

8　表　　彰

主張発表を行った８名の中から最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞５名を選考し、賞状と記念品を贈る。

9　その他

最優秀賞を受賞した者は「少年の主張全国大会」（以下「全国大会」という。）出場候補者として推薦され、審査委員会による審査の結果、北海道・東北ブロック代表（２名）として選考された場合は、全国大会に出場する。

【講　演】

「若者よ“ご縁”をつかめ」

フリーリポーター　中島　美華　氏

『第四十三回青森県少年の主張大会』に参加のみなさん、こんにちは。

カメラに向かっての主張発表、どうでしたか？　練習通りに出来ましたか？　人前よりは緊張しませんでしたか？　カメラのどこを見たらいいのか迷いましたか？　録画した映像を自分で見直してみましたか？　ビデオの向こう側にいる誰かに向かって発表するという貴重な体験をしましたね。

さて、私は本来であればみなさんの発表後、審査している間に講演する予定だったフリーランスのリポーター中島美華です。私も目の前で話す予定でしたが…文章を書いています。これも“ご縁”！話すはずだったことを書くことになったご縁と思って、みなさんのことを想いながら書きます。

テレビ・ラジオでマイクを持って話し、聞き、伝えるリポーターというお仕事をして二十年以上になります。たくさんの人に出会い、たくさんの場所に行き、たくさんの経験をしました。毎日が全く違う一日です。そんな私から若者のみなさんへ伝えたいことは【ご縁をつかめ！】です。

“ご縁”と聞いて、何を思い浮かべますか？そう、今この文章を読んでいるのもご縁。主張大会に参加するのもご縁。生まれたことも、家も家族も学校も…朝ごはんも、です。え？朝ごはん？と思ったあなた。食べ物も育った場所がある。育てた人がいる。運んだ人、作った人もいる。私たちの周りは“ご縁”でつながり“ご縁”に溢れているのです。この“ご縁”に気付くか気付かないか、それ次第で一つの事柄は違って見えてくるのです。せっかく今回、私中島美華とのご縁がつながりました。ご縁に気付き、たくさんのご縁を自分の人生の宝物としてつかんで欲しいというのが私の話です。

ところで、みなさんが今思い浮かべている“ご縁”。もしかして、いいことが多くないですか？楽しい、嬉しい、幸せなご縁。もちろん、いいご縁に恵まれた方がいいのですが、決してそれだけではないかもしれません。

リポーターとして素敵な生き方をしている人たちにお話を聞くと「あの時は本当にダメだと思った」「絶望した」「無理だと思った」そんな言葉が出てきます。そして続きます。「でも、諦めなかったら」「止めるわけにはいかなくて」「続けてみたら」助けてくれる人が現れた。「あの苦しい時期があったからこそ今がある」多くの方は自分が挫折したこと、苦労したことを話してくれます。他人から成功者と思われている人も、最初から成功している訳ではないし、現状に満足せず、未来へのチャレンジに期待と不安を口にすることもあります。挫折の次へ進むと、挫折は“学び”となり“経験”と言えるようになるのだと私は教えてもらいました。

私自身のお話をしましょう。小さい頃は引っ込み思案でした。カメラを向けられると逃げるタイプ。授業中、手を挙げることさえ心臓がバクバクして、発表する時は声が震えました。顔が真っ赤になり、発表が終われば汗びっしょり。リポーターになることなど夢にも思っていませんでした。自分の考えていることを言葉にするのが苦手でした。合唱部だったので歌うことで感情の発散をしていたように思います。

社会人になったある日、高校時代の恩師から連絡がありました。ラジオの収録である小学校の校歌を歌ってくれる人を探しているからとお願いされ、何もわからずに参加。アクシデントが起こっても動じずに歌い続けた私に放送局の方が、「リポーターやってみない？」と声をかけてくださいました。華や

かな世界に興味もなかったのでお断りしたのですが一年後“ご縁”でなぜかラジオカーリポーターを始めます。

当初、自分でも何を話したのか覚えていないほど緊張しました。マイクは手汗でベタベタ。生放送で喋りながら時間など測ることも出来ず…何度も私には無理だと思いました。「一緒にラジオの生放送でお喋りしてもらえませんか？」

朝七時過ぎ、釣りを楽しむ方々に声を掛けましたが、二十人以上に断られてしまいました。初めて会う人たちに思いっきり嫌われてしまった気分になりました。自分がダメ人間な気持ちにもなりました。

（やっぱり向いてないんだ・・・）

落ち込んでいる私にリポーターになるきっかけを作ってくださった恩師が話してくれました。

「声をかける相手は話すのが得意な人か？」

「いいえ、みなさん恥ずかしい、特に訛っているから恥ずかしいって言います」

「そうだろう。恥ずかしいと思う人の方が多いだろう。でも、アナウンサーは話すのが得意な人がほとんどだ。お前のように話すのが苦手な人の気持ちがわかる人間がマイクを持っていてもいいんじゃないかなぁ」

その一言で吹っ切れました。訛っているから喋りたくない、なんてもったいない。地元には素晴らしい人がたくさんいる。知られていない宝がいっぱいある。ぜひ伝えたい。私が訛ってインタビューしますから、堂々と訛って話しましょう！そのスタンスでリポートすると決めました。自分が変われば相手も変わる。訛っていることが理由で断られることは激減しました。そして時代は今、方言を大切にする方向へと進んでいます。二十年前は考えられないことです。

得意なこと好きなことも大切ですが、私のように自分が苦手だと思っていることを職業にする人もいます。苦手だからこそ取り組む意味を見つける人もいます。失敗したからこそ他人の気持ちもわかる気がするのです。何が自分の“ご縁”になるかは、本当にわかりません。

さて、今回の主張発表でみなさんがつかんだ“ご縁”について考えてみましょう。

十代の今、コロナ禍と言われる特別な時期に自分の気持ちや意見、経験を文章にするご縁。それを何度も繰り返し練習し自分の声で表現するご縁。ビデオカメラに向かって主張する体験をするご縁。大会を中止にするのではなく、なんとか若者の声を届けようと努力してくださった方々に支えられた大会に参加したご縁。もしかしたら会えたかもしれない、目の前で発表を聞けたかもしれない同世代の人たちの主張をこの冊子で読むご縁。今回は会えなかったけれど、今後どこかで会えるかもしれない、主張大会に参加した青森県内たった八人のみなさんとのご縁。

私もご縁をつかみました。リポーターというお仕事を通して、初めてお会いした人からその方の心の中や体験談を惜しみなく聞けるなんて本当に貴重であり奇跡であると知っています。他人の体験談を聞くことで自分の人生が豊かになります。みなさんの主張発表は私の人生を豊かにしてくれる“ご縁”なのです。ありがとうございます！みなさんへ拍手を送りたい。文字を大きくしたら気持ち伝わるかしら。

この先、私もみなさんとどこかで出会える“ご縁”を願ってＣＤを贈ります。同じ青森県に暮らす“ご縁”あるみなさんですから。

さあ、どこで“ご縁”がつながるかわかりません。何が“ご縁”になるかわかりません。だからこそ自分次第で変わるのだと思います。どうかご縁に気付き、ご縁をつかみましょう。

あなたの未来の鍵は、あなたの手の中にあります。

第43回 少年の主張全国大会～わたしの主張2021～

内閣総理大臣賞

認め合うことの大切さ

岐阜県　養老町立高田中学校　３年　細川　士禾

みなさん、もしあなたが、片腕のない人を見かけたら、どうしますか。声をかけますか。それとも、かけませんか。もし、あなたがお子さんと一緒にいるときならどうですか。

「見ちゃだめだよ。」そんな声をかけますか。僕の妹には､生まれつき片腕がありません。そのことで、妹はたくさんの辛い思いをしてきました。

「あの子、手がないよ。」

今年の春、妹がある女の子から言われた一言です。妹は、どうしていいか分からないと、戸惑いと悲しみの表情を浮かべ、僕たち家族の前でわんわんと泣いていました。その姿は今でも僕の目に焼き付いています。それを見た母も、本当に苦しそうでした。まるで何もしてあげられない自分を責めるかのように、ただ泣いていました。そのときのことを思うと、胸がぎゅっと締め付けられます。ただ、みなさんに知ってほしいことは、妹は、このような経験を何度もしてきたということです。

そうした中、僕は自然と考えるようになっていました。もし、自分が、逆の立場だったらどうするのだろうと。妹と同じように、片腕がない人がいたら、足がない人がいたら…、僕はどうするのだろうと。

きっと、「見てしまう」と思います。なぜでしょうか。答えは簡単です。「自分と違うから」です。時に、「違う」ことは、問題を引き起こす原因にもなり得ます。しかし、「違う」と認識すること、これは、差別なのでしょうか。そもそも今年の春、妹の手がないと言った女の子。彼女に、相手を苦しめようとする意志はあったのでしょうか。きっと答えは、「NO」です。

僕は思います！僕たちはいつからか、「差別をしないこと」＝「何もしないこと」、ひいては、「目を背けること」だと、大きな勘違いをしているのではないかと。冒頭で話した、「見ちゃダメだよ」という発言も、このような勘違いから生まれた言葉じゃないでしょうか。

違いを認識し、見て見ぬふりをすること、そして、何もしようとしないこと、これこそが、大きな問題だと、僕は思うのです。なぜなら、僕たち人間は、違いを知るからこそ、その先のことを考えることができるはずだからです。

それから僕は、妹にかける言葉が変わりました。

「見られるのは当たり前だよ。だってさ、自分と違うんだから。」聞いた妹は、少しきょとんとして、僕の顔を見つめていました。

僕も妹も母も、辛い経験を多くしてきましたが、考え方一つで、こんなに大きく傷付くことはなかったのかもしれません。相手は違いを認識しただけ。その先が何よりも大事です。僕たちも、もしかしたら、スタートラインに立っていなかったのかもしれません。

妹のおかげで、僕は大切なことに気付けたような気がします。差別とは、考えることをやめ、相手から目を背けることなのです。ですから、「見ちゃだめだよ。」に代表されるような言葉は、一見相手を思いやっているようにも見えますが、考える機会をただ奪うことにもつながりかねない、上辺だけの言葉なのです。ですから、僕たちは、まず、その人らしさを認め、違いを受け入れ、その上で、その人にとってどんな行動や考え方が必要なのかを考え、見つけ出していくことが、何よりも大切なのです。

妹がいてくれたからこそ、僕は目を背けず、考えることができました。

妹がいてくれたからこそ、僕は相手の気持ちを考え、行動することができました。

今の僕があるのは、まぎれもなく妹のおかげです。本当にありがとう。僕は、これからも、妹が、そして、全ての人が、心から笑っていられるように、目を背けず考え続けます。その先に、差別のない社会があると信じて。

文部科学大臣賞

「心のマスク」をはずして

山梨県　北杜市立甲陵中学校　３年　平澤　朋佳

みなさん、マスクをつける日常へと変化したことで、今まで普通に行えていたコミュニケーションが上手くいかず、誤解が生まれてしまったという経験はありませんか。このような、情報を伝えた人の意図と受け取った人の意図が異なってしまうことを「ミスコミュニケーション」というそうです。

私の友人は、仲間からの相談を受けていた時、相手から「今笑ったでしょう」と言われてしまいました。しかし友人は笑うつもりなんてもちろんありませんでした。なぜそのような誤解が生まれてしまったのでしょう。その原因はマスクでした。お互いにマスクをしての会話だったので、表情を間違ってとらえられてしまい、誤解へと発展してしまったのです。まさにこれはマスクによる「ミスコミュニケーション」です。

今、社会ではマスクをつけることがモラルとして定着しています。感染拡大を防ぐ面ではこれはとても重要なことです。ですが私にはこのマスクが、まるで目に見える他人との境界線や壁のように感じてしまいます。

私も似たような経験をしました。小学校の頃の友人と偶然再会したときの出来事です。私は彼女との話が面白くて、笑いながら会話をしていたにも関わらず、彼女から冗談めいた口調で「顔が笑っていないよ。」と言われました。

「そんなことないよ。話、面白いじゃん。」

私は驚いてそう返しました。私は心から面白いと思って笑っていたのですが、相手にはそれが伝わらず、マスクをしたままでのコミュニケーションの難しさを痛感したのです。

学校でも、マスクをつけていることで先輩や新入生の顔がよくわからないという声が多く聞かれます。それを受けて私の所属する生徒会では、全校生徒の交流で何かできないかと考えました。そこで「ＤＡＴＡ１２０」という活動をしようと決めました。１２０とは全校生徒の人数です。全員に名前や趣味、最近の出来事などをプロフィールとして書いてもらい、マスクを外した状態での写真とともに掲示したのです。これによって、相手の趣味や考え方などを共有できたのはもちろん、「マスク姿も素敵だけど外した姿も可愛い」「イメージと違った顔をしているな」と、文字通り素顔を知ることができました。そして、学校にも柔らかい雰囲気と一体感が生まれたように感じました。

人と人との関係を紡いでいくには相手を理解することが重要であり、その手段の一つがコミュニケーションです。ですが、コロナウイルスによってマスク着用がマナーとなった今、顔の大半が隠れ表情がわかりにくくなったことで、コミュニケーションの質にも大きな変化が起こりました。それに伴い私たちは、よりはっきりとした感情の表現や相手の気持ちを理解しようとする心など、コミュニケーションの質を上げていく工夫が必要となってきているのではないでしょうか。

「人生の質はコミュニケーションの質である。」

アメリカの自己啓発家であり、アメリカ大統領など数多くの著名人を指導したアンソニー・ロビンズの残した言葉です。

私たちの心からは、コロナウイルスは感染しません。学校に行ってもマスク、電車に乗ってもマスク、どこを見てもマスクマスクの社会でも、いや、だからこそ、私たちは「心のマスク」を外しコミュニケーションの質、そして人生の質を高めていくことができるはずです。

国立青少年教育振興機構理事長賞

本物の輝き

群馬県　太田市立南中学校　３年　富田　樹香

みなさんは、日本一危険な国宝が何か知っていますか。それは、鳥取県の三徳山三佛寺にある『投入堂』というお堂です。断崖絶壁をくりぬいたような空間に、危なげにたたずむ不思議な投入堂。どうしてこんな所に建てられているのか。写真を見るだけでも興味をそそられるこの場所に、私は母に誘われて二〇一九年の五月に参拝してきました。

私が住んでいる群馬県から、遠く離れた鳥取県にある投入堂。夜行バスや電車、市バスなどを乗り継いで、やっとの思いで到着した入山口。私たちは「六根清浄」と書かれた襷を肩にかけ、神聖な山へと足を踏み入れました。その途端、五感が急に研ぎ澄まされたような不思議な感覚に襲われました。こんこんと湧き出る清水、どこからか聞こえる鳥のさえずり、湿った苔と土の匂い…。身体全体が、まるで自然と一体化したようでした。滑りやすい木の根や鎖を足場にして、命綱なしで登らなくてはならない険しい山道。自然に身をゆだねつつも、全身の筋肉を使って重力に逆らいながら歩みを進めました。

「あれだ！」

少し開けた景色の先に見えたのは、まさにあの写真にあった投入堂。雄大な自然に囲まれ、鎮座するお堂の威厳ある佇まいに私は息をのみ、ただただ「すごい…。」という言葉を繰り返すばかりでした。あの時の衝撃と感動は、今でも鮮明に覚えていますが、うまく言葉にすることはできません。そんなかけがえのない体験になりました。

私はこれまでに、教科書や本に載っているような、国宝や世界遺産、お城などをいくつも巡ってきました。それは母の影響です。母のモットーは、『本物を知る』こと。幼い頃から私や兄を、全国のいろいろな所へ連れて行ってくれました。私は幼い頃から好奇心が旺盛で、疑問に思ったことを何でも質問するような子どもでした。私が興味を示すと母は、

「それ、絶対本物を見た方がいいよ！」

と言って、実物を目にする機会をたくさん与えてくれました。小学一年生の時に、この旅の最初の地として訪れたひめゆりの塔。当時の私にはさほどの知識もありませんでしたが、何とも言えない強烈な衝撃を受けたことは、今でもはっきりと覚えています。思えばあの時から、私も『本物を知る』ことに魅了されていたのかもしれません。

デジタル化が急速に進む現代、日本を初め世界中で、バーチャルな世界の可能性が広がっています。いろいろなことを疑似体験できるようになることが、技術の進歩として賞賛されることも珍しくありません。また、そんな折に私達を襲った、コロナウイルスの猛威。ステイホームの名のもとに、インターネットや電子機器を活用する生活の在り方が求められるようになり、それらに対する期待や価値も高まりました。

時代の流れに逆行しているかもしれませんが、私はこういった風潮に、ぼんやりとした疑問を抱いています。それは、私や母が大切にしてきた『本物の価値』が薄れていくように感じるからです。本物がもつ力は本当に凄い。手間や時間をかけて本物を訪ねるからこそ、そのものの質感や色合い、大きさ、匂い、雰囲気などが実感をもって感じられ、どのような風土を背景に存在しているのかが分かる。それこそが『本物の学び』になると思うのです。現代のテクノロジーを駆使すれば、遠く離れた場所にあるものでも、簡単に画面を通して見ることができますし、自分が知りたい情報があれば、即座に調べることもできます。それも一種の学びや経験であり、価値がないとは思いません。しかしそれは、記憶に焼き付くような深い学びと言えるのでしょうか。木の根をつかみ、ぬかるんだ登山道を一生懸命上った先に見たあの感動は、画面を眺めただけのものとは全く異質なものだと思いませんか。

私は、『本物を知る』ことの価値を教えてくれた母に感謝しています。私達が生きていくこれからの世界は、いろいろなテクノロジーが発達し、きっと想像もつかないほど便利な世の中になっていくのだと思います。それでも私は、手間や時間をかけて『本物』を訪ねる旅を続けたいと思います。母や家族と旅をし、自分一人で旅をし、自分の子供や孫たちともそんな旅を続けていくことが、今の私の夢です。それが私の人生を豊かなものにしてくれると確信しています。

最後に皆さんに問いかけます。あなたが今、目にし、感じているものは『本物』ですか。

審査委員会委員長賞

教室

熊本県　宇城市立松橋中学校　３年　葛谷　護

朝七時五十分、僕は教室に入ります。いつも通り、道具を片付け、友達と話したり、みんなに提出物を呼び掛けたりしています。そこに彼の姿はありません。彼にとって三年五組の教室には見えない壁があるようでした。

彼は仲のいい友達の一人です。小学校の頃は教室で一緒に過ごしていました。しかし、中学生になると彼は別室に登校するようになっていたのです。僕は彼がいる別室に行き、一緒に給食を食べたり、たわいもない話で盛り上がったりしていました。夏休みには、水泳の補講を受けるために、一緒に登校したこともあります。その途中も、僕の質問に彼が頷いたり、笑い合ったりと楽しい時間を過ごしていました。彼がいることでその場がほのぼのとした雰囲気になり、とても居心地がいいのです。それは、彼の笑顔が僕に安心感を与えてくれるからかもしれません。二人だととても穏やかな彼が、どうしたら教室に入れるのかと考える自分がいました。彼は集団が苦手なため、教室に入りたいという気持ちがあっても動けなくなるということは知っていました。なぜなら、教室近くの階段の所で蹲っている姿を何度も見かけたからです。

三年生になった今、彼は給食時間に教室で食べることができるようになりました。新型コロナウイルス感染症対策で、前を向いて黙食しているので、楽しく話しながら食べることは、残念ながらできません。それでも、目の前に友達の姿があることはとても嬉しく、ほっとします。いるべき人がいることの喜びを実感しています。彼が踏み出した一歩は、僕にとっての一歩でもあるのです。

僕には自閉症を持つ十歳の弟がいます。弟は感情のコントロールが苦手で、些細なことで怒って衝突することもありました。しかし、僕にとって弟のその姿が当たり前だったのです。弟はレゴやプラモデル作りが好きなので、アドバイスをしたり、一緒に作ったりしています。困っている弟の姿を見て、自分にできることでサポートしようと行動してきたので、今では弟がやりたいことや苛立っていることなどがわかるようになりました。だから、友達がきつい思いをしているときにも、自分ができることをしていこうと思ったのです。

僕の友達は今、少しずつ教室に入れるようになっています。しかし、教室に入れない人、学校に来ることができない人は僕たちの身の周りに存在しているのです。あなたは誰が教室に来ていないのか、何日教室に入れていないのか認識できていますか。また、そういう人たちが入れるような教室になっていますか。

教室の空席に自分の物を置く人がいます。欠席者の担当棚に荷物を置いている人もいます。その人たちは悪気がなく、単に空いているから使っただけなのかもしれません。しかし、考えてみてください。その席の持ち主はいるのです。そこが必死の思いで教室に来た人の席だとしたら。その人が今、目の前の光景を見たら、どう思うでしょうか。悲しい思いと同時に、「ここには自分の居場所はない」と感じ、勇気を出して教室に来たことを後悔するかもしれません。

「教室に入りたい、みんなと一緒に授業を受けたい」という仲間の願いをかなえるために、僕は次のことが大切だと考えます。

まず、その友達の存在を感じること。その人がいなくても何事もなかったかのように過ぎていく教室の時間は寂しすぎます。いなくて当たり前ではないのです。さらに、友達のためにできる小さなことを、一人一人が考えて動くこと。それは「してあげる」ではなく、「一緒にする」ことだと考えます。一人の百歩より百人の一歩が大事なのではないかと。

僅かなことしか僕にはできません。しかし、これからも僕は自分と友達の為に行動していきます。同じ教室で一緒に笑い合うために。

審査委員会委員長賞

私の挑戦

沖縄県　宮古島市立久松中学校　１年　砂川恵里香

私の左手には、生まれつき肘から先がありません。このような左手ですが、皆さんが予想する以上に出来ることはあると思います。例えば、毎日自転車で登校しています。バドミントン部に所属し活動しています。体育の時間には水泳にも取り組んでいます。幼い頃から、やってみたいと思ったことに挑戦し、諦めずに努力をしています。そのきっかけとなったのが、私が幼稚園の頃のことです。その頃の私は、うんてい棒や遊具など、楽しそうに遊ぶ友達をうらやましく見ていました。そのような私をいつも優しく見守り、サポートしてくれたのがヨウコ先生です。先生は、左手がない私に出来ることを増やせるように、色々な物を作ってくださいました。その中で一番思い出に残っているのが、特製縄跳びです。それまで両手を使う縄跳びは、絶対出来ないと思っていました。しかし、私がみんなと同じように縄跳びが跳べるように、両手を使うのではなく、肘にはめる特製縄跳びを作ってくださったのです。私はとても嬉しくて、何回も特製縄跳びを使い、友達と遊んだことを今でも覚えています。縄跳びの他にも、「こうすればできるんじゃないかな。」とサポートしてくださり、頑張って挑戦する私を笑顔で褒めてくださいました。

幼稚園を卒園した後も私は、多くのサポートをいただきながら、さまざまなことに挑戦しました。水泳、そろばん、書道など。私に出来ることが増えると、両親をはじめ祖父母、先生方、身近な人達が喜び、応援してくれました。その度に「出来るってこんなに嬉しいことなんだ。もっとがんばろう」と実感し、自信を持てるようになりました。

ところで、体育の授業で鉄棒やマットの時、実際に取り組む前から「ムリ、できない。」という声を耳にすることがあります。そんな時「両手があるのに、なぜそんなことを言うのかなぁ」と思います。やる前から「出来ない」と決めつけてしまうことを不思議に思います。同時に「私はやってみたい。どうすれば出来るようになるかな。誰にどんなサポートをお願いしようかな」と考えはじめます。

私たちには、いろいろな場面で挑戦するチャンスがあります。そのチャンスを活かすことなく自分で潰してしまうのは残念なことだと思います。小さくてもいい。挑戦を繰り返し、成功体験を重ねることで、自信をもつことができます。私たちには無限の可能性があります。その可能性を最大限に広げるのは、他の誰でもなく自分自身ではないでしょうか。

新しいことに挑戦する場面になった時、現状で出来ないと判断するのではなく、成功するという可能性を信じて、サポートをお願いするのも一つの手だと思います。一人で抱え込まず、誰か相談できる人・助けてくれる人・支えてくれる人、そうです、サポートしてくれる人を捜すのです。挑戦したい・克服したいと思った時、勇気を出して近くにいる人を頼るのです。サポートしてくれる人が、誰か近くにいると思います。私にヨウコ先生や多くの方々がいるように。いただいたサポートで笑顔になると、自分自身も周りの人達も幸せになれると私は思います。

私は将来どのような職業に就きたいのか、具体的にはまだ決まっていませんが、人助け・サポートをする仕事に就きたいです。自分自身がいただいてきたサポートの恩返しをしたいからです。また、これから出会う人達と、挑戦したことを語り合い、お互いの可能性を高め合いたいです。その時に向け、広い視野を持ち挑戦を続けます。

現在私は身体が成長中のため、義手を作ることができません。何年後かに、身体の成長具合と相談しながら、義手を装着する予定です。義手を装着し、両手を使ってやりたいことがあります。それは、毎朝母に結んでもらっているこの髪型を、自分の手で結びおしゃれを楽しむことです。

第４３回少年の主張全国大会～わたしの主張 2021 ～
開催要綱（WEB 開催）

１．趣　　旨　少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化る現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。
　そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。
　少年の主張全国大会は、子どもたちにとってこれらの契機となることを願い実施するものです。

２．開催期間　令和３年１１月１日（月）～１１月３０日（火）
※審査結果は１１月１４日（日）に掲載します。

３．開催方法　上記の期間、少年の主張全国大会 WEB ページに全国大会出場者（１２名）の主張発表動画を掲載し、１１月１４日（日）に審査委員会で審査した結果を掲載します。
　なお、全国大会に選出されなかった作品については作文を掲載します。

４．対　　象　日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの
※国籍は問わないが、日本語で発表できること。なお、作品は未発表、自作のものに限ります。

５．主　　催　国立青少年教育振興機構

６．協　　力　都道府県、青少年育成都道府県民会議、全日本中学校長会、日本私立中学高等学校連合会、公益法人日本ＰＴＡ全国協議会

７．後　　援　内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会、社会福祉法人全国社会福祉協議会

８．主張発表者（出場者）・発表内容

（１）主張発表者　各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者１名、計 47 名の中からブロック代表として選ばれた 12 名が主張発表を行います。

（２）ブロック代表定数　全国を５ブロックに分け、ブロック毎の定められた出場者数のブロック代表を選出します。
○北海道・東北ブロック：２名　○関東・甲信越静ブロック：３名
○中部・近畿ブロック　：３名　○中国・四国ブロック　　：２名
○九州ブロック　　：２名

（３）発表内容　ア．社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
イ．家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
ウ．テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

（４）発表時間　５分程度（400 字詰原稿用紙 4 枚程度）

９．表　　彰

（１）全国大会出場者全員（12 名）に国立青少年教育振興機構理事長より奨励賞、全国大会出場者に選考されなかった都道府県代表者全員（35 名）に同理事長より努力賞を贈ります。

（２）全国大会の審査委員会で審査の上、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞を選考し、賞状を授与します。また、審査委員会の審査過程によっては、審査委員会委員長賞が選考される場合があります。

（３）全国大会出場者全員（12 名）に、記念品が贈呈されます。また、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞・審査委員会委員長賞を受賞された方には、副賞が贈呈されます。

～育てよう　未来を見つめる　かがやく瞳～

青少年育成青森県民会議

〒030-8570

青森市長島1-1-1　青森県青少年・男女共同参画課内

TEL：017-734-9224

FAX：017-734-8050

E-mail：seishonen@pref.aomori.lg.jp